小学校英語 Just Now

「心の理論」にたどりつくまで ―滋賀大学附属小学校の外国語活動を振り返る

田村幸誠　Tamura Yuki-Shige
（滋賀大学）

1. はじめに

5年ほど前のある日，滋賀大学附属小学校の校長先生から「今後本格的に始動する附属小の外国語活動を手伝ってくれないか」と依頼を受けた。私の専門は英語学で，児童英語，ましてや小学校教育に関してはほとんど知識がなかった。断ることも頭をよぎったが，これから始まる「小学校英語」に携わってみたいと思い，話を引き受けた。

附属小の外国語活動担当者は，教員歴15年のベテランの永石利行先生であった。熱心そうないい先生でホッとしたが，これまで理科教育を中心に取り組まれてきた先生で，英語に関しては，「昔習った英語を今必死で思い出してますわ」と笑顔で話されていた。

私と永石先生は，目標を「普通の公立小学校で，週に一度の外国語活動で実践可能なベストの授業を考える」ということに定めた。以下，永石先生の外国語活動での試行錯誤を振り返りながら，私たちがその場その場でどのようなことを考え，表題にある「心の理論」に達したのかを報告したいと思う。

2. 学級担任が主導する外国語活動

外国語活動の担当に決まってから，永石先生は近隣で開かれる授業研究会，講習会などに積極的に参加された。また，前倒しで外国語活動を始めている学校に行き，授業見学もされた。その報告を私が聞くという形で2人の勉強会は進んでいった。1年ほどたった頃には，勉強会のテーマは「学級担任の主導」と「コンテンツのあるアクティビティ」の2つに絞られた。

まず，「学級担任の主導」であるが，一般的に小学校外国語活動に対して期待が大きいのは「発音」といえるかもしれない。文部科学省の学習指導要領でも発音について触れているし，見学に訪れた学校や先進的といわれる授業を導入している学校でも，歌やPhonicsに焦点を当てているところが多かった。「英語」の授業として，その方向性に間違いはないと思われた。

しかし，私たちは，発音の重要性は十分理解しつつも，歌やPhonics，発音の練習を授業の柱に据えることをしなかった。その理由は，外国語活動をイベント化させてはいけないということにあった。たとえば，2週間に一度，ALTがクラスにやってきて，歌ったり踊ったりする。児童も楽しそうにそれをする。担任の先生は後ろでその様子を見ているだけ，というのは外国語活動にありがちな光景だ。あるいは，研修会の模範授業で，日本人の先生が格好よく児童相手に英語で授業を展開していく。永石先生からするとそれらはイベントであり，学級にも，また将来の外国語学習にも，いい影響を及ぼさないという。小学校において学級をいい状態に保つことは必至であり，それゆえ，普通の授業の流れの中に外国語活動があることがベストだという。平素のリズムが壊れてしまうことが，小学校の担任としては一番困ることだとおっしゃった。また，児童に「外国語＝イベント」という認識を持たせることは，中学校以降の学習にも決していい影響を及ぼすとは思えないとも話された。

英語教師の私は，英語のことのみに目が向いていたので，永石先生の意見には目から鱗が落ちた。さらに，永石先生からは，「他の授業と同じように担任が指導案を作りたい，それを作成する上での『視点』を手に入れたい」との注文が入った。

3. コンテンツを求めて

取り組みを始めて2年目，永石先生も外国語活動の研究授業を行うようになった。しかし，授業後の討論会での評価は芳しいものではなかった。「せっかくALTがいるのに，なぜもっと本物の英語を聞かせないのか？」「授業の雰囲気が英語らしくない」などの意見が毎回出された。

文部科学省が小学校外国語活動に求めていることを大雑把にまとめると，「文法指導等は行わず，英語嫌いをつくらず，その上で，コミュニケーション力の素地を養う」ということになろう。それらを踏まえて外国語活動を考える中で出てきた永石先生の悩みは，まとめると次のようになる。英語表現を知らなければコミュニケーションはできない。しかし，その定着を狙うとひたすらパターンプラクティスをすることになり，コミュニケーションの時間が取れない。また，たとえば，『英語ノート』のcanの表現には他動詞も自動詞もあるが，この違いを教えることは文法指導であり，外国語活動とはほど遠くなる。3，4つの具材（の絵）をのせ合ってパフェを作るペア・ワークは，「コミュニケーション力」にどうつながるのだろうか。

悩みが続く中，有名な言語学者らが外国語活動向けに書いた本も，積極的に授業に導入した。日本語・英語・中国語の語順の違いに気づかせる，様々な接尾辞が使われた単語の共通性に気づかせる，等が記されていたが，「言語の本質」を強く意識した教材は授業内容が知識理解に向かい，児童の関心もばらつくために授業可能性が低くなり，コミュニケーションという目標からも逸れてしまう。授業のコンテンツでさえ専門家によってバラバラである現状は，永石先生を非常に混乱させた。

3年目のある日，私は「言語の本質ではなく，コミュニケーションの本質を考えましょうよ」と永石先生に提案をした。たとえば，Michael Tomasello (2005) によると，人のコミュニケーションには強い動機づけが働いており，また，他者の心を読み取って行動することは，人間のコミュニケーションの一番の特徴だという。この「強い動機づけ」と「他者理解」という2つのキーワードは，永石先生の授業を一変させた。

まず，「強い動機づけ」に関しては，たとえば上記のcanの表現なら，『英語ノート』に出ている全ての表現に目を向けるのではなく，児童に一番得意なことを考えさせ，それをクラスメートやALTに伝えたいと思わせることがテーマになる。授業のねらいは「各児童がオリジナルの表現を1つ身につけること」となる。

また，「他者理解」に関しては，たとえばハンバーガーを作るというアクティビティにおいて，まずALTが「痩せたい」「朝から何も食べていない」などをジェスチャーつきで表現し，それらをもとに，児童はALTにとって最高のハンバーガーは何かを考える。そして，それを伝えるために食材の英語を覚える，という流れを作るのである。ビンゴゲームなどのアクティビティが「音」に反応して行動するだけであるのに対して，行動の前に，常に相手のベストを考えるようにアクティビティの構成を工夫するのである。

このポイントを踏まえた研究授業を数回行ったところ，以前に比べていい評価が得られている。飛び交う英語の量は以前とさほど変わらないが，授業のねらいが明確になったこと，それ以上に，児童がより活発に参加するようになったことが，いい評価につながったのだと思う。

永石先生は，一昨年から研修で滋賀大学の大学院に通われ，この春に修士論文を提出された。ここで書いた永石先生の試行錯誤が，指導案，授業後の振り返り，参考文献等とともに記されている。滋賀大学教育学部図書館のホームページからダウンロードできるので，興味のある方は是非ご一読いただきたい。

【参考文献】
Tomasello, Michael (2003) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition,* Harvard University Press, Harvard.